

素肌とメイク肌における透明感構成要素の比較

Components of skin transparency: comparison between bare skin and makeup skin

○谿 雄祐¹, 村松 慎介², 小林 伸次², 増渕 祐二², 長田 典子¹
(1: 関西学院大学, 2: 株式会社コーセー)

E-mail: tani.y@kwansei.ac.jp

1. 緒言

顔の色味や肌質感は、健康状態だけでなく魅力の判断における手がかりとなる重要な社会的情報であり、我々は洗顔やスキンケア、化粧品といった肌質感に関わる行為を日常的に行っている。肌の透明感とは他物質に対する肌の特徴的な質感であることに加え、美容分野において重要な質感の一つであり、様々な関連研究が行われている。例えば、著者らは前年度大会において、白さと明るさが30代から60代の全年代において透明感と正の相関関係にあることを報告した。

本研究では、素肌とメイク肌のそれぞれにおいて、透明感を構成する要素を明らかにするために、肌質感に関する専門家を対象にした言語表現の収集と、収集した言語表現の関係性を明らかにする実験を行った。

2. 方法

透明感に関連する質感や状態を表現する語句を素肌、メイク肌のそれぞれについて収集するために、著者所属企業の社員のうち、商品開発、メイキャップアーティストなど肌に関連する業務を日常的に行う73名の協力を得て調査を実施した。調査は透明感を感じる素肌およびメイク肌を形容する語句を可能な限り書き出す自由記述方式で行った。

出現頻度が高い言語表現を透明感関連語として、それらの意味的な距離を測定する距離測定実験を行った。距離測定実験では、透明感関連語を2つ提示し、それらが意味的に置換可能かどうかを判断させた。透明感関連語は素肌、メイク肌ともに47語であり、それぞれについてすべての組み合わせについて置換可能性を20名の協力者が回答した。距離測定実験の協力者も自由記述調査と同様に、日常的に肌質感に関連する業務に従事する社員であった。

3. 結果

距離測定実験の結果から、素肌とメイク肌それぞれについて、透明感関連語間の意味的な距離を示す距離行列を得た。関連語間の距離は、置換不可と回答した協力者の割合(20名中12名が置換不可と回答した関連語間の距離は0.6)とした。距離行列に対して多次

元尺度構成法(MDS)を実施し、透明感関連語を多次元空間に定位した。さらに、MDSの結果に対し階層クラスタ分析を実施し、透明感を構成する肌質感を得た。これらの結果を、第1次元と第2次元をx軸とy軸に取った散布図として図1にそれぞれ示す。

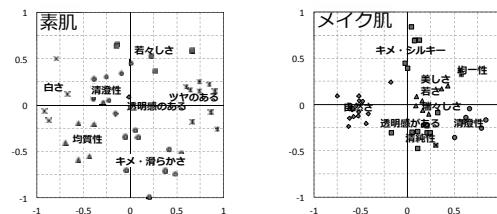


図1. 透明感関連語マッピング結果

素肌とメイク肌に共通する透明感関連語24語に着目し、2つのMDS結果の類似度をプロクラステス解析により定量的に評価した。その結果、両者の間には高い類似性が認められた($r = .90$)。

4. 考察

素肌とメイク肌の透明感関連語を抽出した結果、約半数が共通していたことと、マッピングとクラスタリングの結果は、両者の透明感の類似性を示唆しており、プロクラステス解析によりその類似性が確認できた。本研究の結果から、透明感がある肌とはメイクの有無によらず、キメが整い、若々しく、均質で清らかさを感じる肌であると言える。

一方、それぞれに固有な透明感関連語から、「赤ちゃんのような」「生まれたての」など経年変化が生じていない「純粋さ」が素肌における透明感の要素であると考えられ、メイク肌については「素肌のような」や「薄膜な」など素肌に近く化粧が過剰でない様子だけでなく、「薄絹をかぶせたような」「シルキーな」など上質なキメと滑らかさが含まれていることが伺えた。

5. 結言

専門家から収集した素肌とメイク肌それぞれの透明感関連語を、意味的な距離に基づいて多次元空間に定位した結果、素肌とメイク肌の透明感の類似性が確認できた。また、それぞれに固有な透明感関連語から、素肌に特徴的な透明感構成要素は純粋さ、化粧により付与される透明感は上質感であると考えられる。